

氏名	黒川洋一 くろかわよういち
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第128号
学位授与の日付	昭和54年1月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	杜甫の研究

論文調査委員 (主査) 教授 清水 茂 教授 湯浅幸孫 教授 島田度次

論文内容の要旨

本書は著者がこの二十年間に書いてきた中国、八世紀の詩人杜甫に関する論文二十篇を、その内容の上から、(一)文学的研究、(二)作品の研究 (三)杜甫と仏教 (四)杜詩の発見 (五)日本における杜詩 (六)雑考 の六章に構成したものである。これら六章、二十篇の論文に取りあげられた問題は、杜甫文学のいろいろの面にわたるが、それらを一貫するものは、杜甫の詩のどこがすぐれるのか、その詩のどこが人を感動させるのかという根本的な問題である。著者はその問題を中心に据え、堆積する先人の注釈、詩話の類を渉猟しながら、従来の研究がおろそかにしていた諸問題について、考察を加えようとする。いま、その内容を概観すれば、次のごとくである。

第一章の「文学的考察」は、杜甫文学の本質を、「詩人としての自覚」、「杜詩の象徴性とその哲学」、「杜甫における李白の意味」の三つの面より考察する。「詩人としての自覚」は、今日の詩人とは異なる条件の下にあった唐代の詩人に、はたして詩人としての自覚があったかどうかという問題を提出し、それに対して著者は、少なくとも杜甫のばあいには、そうした自覚が晩年の夔州の詩に見られることを、主として「詠懐古跡、五首」の第三首の終聯「千載琵琶作胡語、分明怨恨曲中論」の解釈を通して主張するとともに、杜甫はそうした自覚のもとに自らその詩篇を整理編纂した形跡のあることに言及する。「杜詩の象徴性とその哲学」は、杜甫の詩が感動的なのはなぜかということ、
「北征」の子供の描写について考えようとしたものである。著者はまず杜甫の子供の描写を、同じく子供の仕草を詳細に写した晋の左思の「嬌女詩」と比較して、杜甫の詩の感動の根元を、その描写の象徴的性格の中に見いだすとともに、そのことを「北征」の詩におけるもう一つの小さなもの、つまり山の木の実の描写について確認し、さらにそうした象徴性の背後には、やがて十一、二世紀に至り、宋学として結実する哲学があったことに言及して、この詩人の中国思想史の上に占める重要性を示唆しようとする。「杜甫における李白の意味」は、杜甫と李白との交遊の実態を追究し、杜甫の文学が李白を否定的媒介として成立したものであったことを論じ、杜甫における李白の存在の重要性を指摘したものである。二人の交遊についての従来の見解が単に文学史上における一佳話とするのにとどまっていたのに対して、著者は二人の交遊を一段と掘り下げて、天才と

非天才との葛藤という芸術上の問題として取りあげ、杜甫文学の成立の契機を明らかにする。

第二章の「作品の研究」は、『崔氏東山草堂』詩の作時について、『秋興八首』序説、『又呈吳郎』の詩について、『登岳陽樓』の詩について、『風疾、舟中伏枕書懷、三十六韻』の作時について』の五篇の詩についての論考よりなる。『崔氏東山草堂』詩の作時については、『宋本杜工部集』が、この詩を安祿山の乱時の作として編次し、終聯の「何為西莊王給事，柴門空閉鎖松筠」の二句について、「王維時被張通儒禁，在東山北寺，有所嘆惜，故云」と注することの非を述べ、この作を乱後の華州にあっての作に編次する仇兆鰲らに従うべきことを論ずるとともに、宋本に見えるいわゆる杜甫の自注なるものすべてを信ずることの危険性を指摘する。なお、芭蕉の「この秋は何で年よる雲に鳥」の句が、杜甫のこの詩の終聯を意識するかも知れぬとする指摘は、後の「芭蕉文学における杜甫」への伏線である。『秋興八首』序説は、杜甫晩年の名作「秋興八首」について、杜甫晩年の詩の美しさの秘密が、その詩のもつ意味のアンビグイティにあることを、首章の「叢菊兩開他日淚，孤舟一繫故園心」の解釈を通して指摘し、さらにそうした詩美が晩年の不安と懷疑との反映であることを、第二章の「請看石上藤蘿月，已映洲前芦荻花」の解釈を通して説き、さいごに晩年の杜甫が不安と懷疑にさいなまれながらも、人間の世界の永遠に対する信頼を失っていなかったことを、第三章の「回首可憐歌舞地，秦中自古帝王州」の解釈を通して説き、「秋興八首」の美しさの極限を第三章の詩に求めようとする。『又呈吳郎』の詩については、従来定解をえない第三聯の「即防遠客雖多事，便挿疏籬却甚真」について、諸注を検討しながら新解釈を提出したものである。著者は、前句の「防」の語を、杜甫自身が吳郎に対して警告することと解するとともに、後句の「真」の語を杜詩における用例の上から、生一本、一本気のことと解することにより、二句は無理なく解釈しようとす、旧説が多く、「防」を隣婦が吳郎を警戒することと解して、「甚真」の語を「任真」に改めることの非を指摘する。『登岳陽樓』詩については、その第二聯の「吳楚東南坼，乾坤日夜浮」の二句について、旧説を批判して新解釈を提出するとともに、その解釈を通して杜甫の想像力の秘密の一端を明らかにしようとする。著者によれば、前句は吳楚の大地が天下の東南部にあって裂開して湖水となっているということで、旧説のいうがごとくに、吳は東に、楚は南に湖水によって分断されているということではなく、後句も乾坤が湖中に浮動するというので、旧説が湖水が天地の間に浮かんでいると解するがごとくではないとし、さらにそうした詩的形象の成立には、『淮南子』天文訓に見える共工伝説と、『晋書』天文志などに見える渾天の宇宙観が関係を持つとする。『風疾、舟中伏枕書懷、三十六韻』の作時については、この詩が大暦三年十二月、江陵から潭州に向かったの南航時の作であることを、「十暑岷山葛，三霜楚戶砧」の二句にもとづいて論証し、従来の注家がこの詩を、大暦五年冬、潭州を発って北航し、洞庭湖上に病没する直前の作とすることの不可なることを述べ、後の「『唐書』杜甫伝中の伝説について」の伏線とする。

第三章の「杜甫と仏教」は、杜甫と仏教との関係を考察する「杜甫の仏教的側面」、「杜詩における摩訶薩埵の投影」、「『秋日、夔府詠懷、一百韻』における『七祖禪』についての考察」からなる。「杜甫の仏教的側面」は、杜甫と仏教とのかかわり合いをいろいろの面から論じて、杜甫を儒家的見地からのみ見てきた南宋以後の杜甫観の修正すべきことを説いたものであるが、杜甫の帰依していた仏教が、慧能、神会の南宗禪であったことを、賛公との交遊を手がかりにして考証するほか、杜甫の家庭の中に仏教信者の

いたことを、「縛鶏行」や、「信行修竹筒」の詩によって指摘し、晩年の杜甫の詩のもつ温かさが、仏教と関係をもつことを、「秋野、五首」の第一首の「盤飧老夫食、分減及溪魚」の「分減」の語が『華嚴經』に見えることによって指摘する。「杜詩における摩訶薩埵の投影」は、秦州から同谷に赴くときの詩の一つである「鳳凰台」について、杜甫と仏教との結びつきを論じたものである。それによれば、杜甫がその詩の中で、山上に巣くう母鳥を亡くした鳳凰のひなの生育を助けるべく、わが心臓を引き裂いて、その血を飲ませたいと歌っているのは、『金光明經』などの仏典に見える摩訶薩埵太子の投身飼餓虎の物語の投影であり、われわれはそのことを当時の極東におけるこの物語の伝播の状況から推測することができるという。『『秋日、夔府詠懷、一百韻』における『七祖禪』についての考察』は、詩中に見える「身許双峰寺、門求七祖禪」の「七祖」がだれを指すかということを詳しく考証したものであるが、著者は杜甫が仏教に関心を抱きはじめる天宝年間の長安における禅宗界の形勢より推して、杜甫が七祖と仰いだものは荷沢神会であったに相違なく、杜甫がその晩年に湘江を下って耒陽に赴いているのも、南宗禅の聖地である六祖慧能の故寺、嶺南韶州の宝林寺を訪ねようとしたことであったと主張する。

第四章の「杜詩の発見」は、「中唐より北宋に至る杜詩の発見について」、「『唐書』杜甫伝中の伝説について」、「王洙本『杜工部集』の流伝について」よりなる。「中唐より北宋末に至る杜詩の発見について」は、杜甫の死後より、杜甫が詩聖としてし地位を獲得する北宋末に至るまでの杜甫についての評価の歴史を詳細に述べたものであるが、王洙本と錢注本の異文によって、最初の杜集である樊晃の『杜工部小集』に収録されていた詩の一部を明らかにしたこと、白居易は杜詩の全集に近いものを見たに相違ないこと、『旧唐書』杜甫伝に「集六十卷」とあるのは、六巻の誤字ではなかったかということ、顧陶の『唐詩類選』に収録されていた杜詩の一部を、曾季狸の『艇齋詩話』によって明らかにしたこと、王洙・王琪本に集大成されるに至る北宋における杜集編纂の経過を明らかにしたことなど、前人未発の多くの創見を提出する。『『唐書』杜甫伝中の伝説について』は、『唐書』杜甫伝中に見える二つの伝説、すなわち杜甫は敵武に対して無礼な行為が多かったために、敵武にうとまれ、殺されようとしたという話と、杜甫が耒陽において大水にあい、数日のあいだ食物を得ることができずにいたとき、耒陽の令から届けられた牛肉と白酒の食べすぎ、飲みすぎがもとで亡くなったという話とについて、それらの話はなにを根拠として生まれたものであるか、またそれらの話はどのような変化を遂げたかということを詳述するとともに、それらの伝説の発生と演变には杜甫評価の変化が密接に関係していることを述べ、伝説の変化を通して杜甫評価の変遷と推移を見ようとする。「王洙本『杜工部集』の流伝について」は、上海図書館所蔵の『宋本杜工部集』について、そのテキストとしての性格や、成立の事情を探り、さらにその流伝の経過と、それにともなって発生したいくつかの影抄本について記したものであるが、著者はこの上海図書館本の中に含まれる影抄部分が、わが国の静嘉堂文庫に所蔵される影抄本をもとにしたものであること、この宋本杜集を清初の錢謙益は見たに相違ないこと、この杜集に含まれる吳若本と推定されるものが、錢謙益本の底本となったとされる吳若本とまったく同一のものではないということなどの創見を提出する。

第五章の「日本における杜詩」は、「日本における杜詩享受の歴史」、「芭蕉文学における杜甫」、「島崎藤村における杜甫」よりなる。「日本における杜詩享受の歴史」は、平安朝の初めから、現代に至るまでのわが国における杜詩研究の状況と、杜詩の国文学に与えた影響とを詳細に跡づけ、わが国における杜

詩享受の全貌を明らかにしたものである。著者は杜甫の詩の最初の影響を、平安朝初の『文華秀麗集』の中に見だし、まず平安朝における杜詩享受の状況を説き、ついで杜甫の詩が巨大な姿を邦人の前に現す吉野朝から室町時代にかけての五山を中心とする杜詩研究の状況を詳細に説き、ついで寛文から元禄にかけての『杜律集解』の盛行と、その芭蕉文学への影響、中ごろの渡会末茂の『杜律評叢』、津阪孝緯の『杜律詳解』などの業績を紹介し、最後に近代の島崎藤村、正岡子規、森 鷗外、中江兆民らへの影響と、森槐南、鈴木虎雄らの業績に説き及ぶ。「芭蕉文学における杜甫」は、芭蕉の俳諧に及ぼした杜甫の影響を述べたものであるが、従来の研究が単にことばの表面における類似を指摘するにとどまっていたのに対して、著者はことばの表面には現われぬ深部における影響を重視し、芭蕉が杜甫に共感したのは、その反俗の精神であったということ、芭蕉の杜甫理解は意識的な誤解であったということ、芭蕉芸術における景情一致の技法は杜甫に学んだものであったことなどを指摘する。「島崎藤村における杜甫」は、「千曲川旅情の歌」における「ただひとり岩をめぐりて、この岸に愁を繋ぐ」という表現が、杜甫の「秋興八首」の首章における「孤舟一繫故園心」から影響を受けていることを指摘し、藤村の詩における杜甫の影響の一端を明らかにしたものであるが、著者は「孤舟を一に繋ぐは故園の心よりす」と普通には訓ぜられるこの杜甫の句を、もし「孤舟に一に故園の心を繋ぐ」と訓ずるならば、それは藤村の「この岸に愁を繋ぐ」という表現と揆を一にすることになると論じ、藤村のこの句が杜甫の句の影響のもとに生まれたことの旁証として、小諸時代の藤村が「秋興八首」に特別の関心を抱いていたことが、『桃の雫』の中に見える「杜子美」という文章によって知られることを挙げる。

第六章の「雑考」は、「杜詩『幽興』考」、「杜甫と薬草」、「杜甫家族考」からなる。「杜詩『幽興』考」は、杜詩における「幽興」の語が、のどやかな自然に対する感興の意に用いられていることに着目し、本来くらいこと、おくぶかいことを意味した「幽」の字に、杜甫が自然の意を付与したのは、杜甫が自然を奥行きを持つ一つの生命体として把握し、自然現象の背後にこの宇宙の根元にあるよきものを見ようとした詩人であったことによることを説くとともに、「何將軍山林」の前後十五首の連作の中に、「幽興」のほか、これに類する「幽意」の語が頻用されているのは、この時期の杜甫が、そうした新しい自然観を獲得した得意さを示すものであるとする。「杜甫と薬草」は、「乾元中、寓居同谷県作歌、七首」の第二首における「黄精無苗山雪盛」の句について、従来の注家が薬草を意味する「黄精」では意味をなさぬとし、一本に山芋を意味する「黄独」に作るのに従って解そうとすることの非を論じ、杜甫が雪の山中に黄精を掘りに出かけるのは、それを食用に供さんがためではなく、それを市に売って暮らしを立てんがためであるとして解すべきことを説くとともに、よしそれが歌行体の詩における虚構であったとしても、その発想の背後には、若いころ薬草を売って暮らしを支えていた体験のあることに言及し、唐代における詩人の生活の一面を明らかにする。「杜甫家族考」は、杜甫の抒情の新しさの一つである家族についての詩の諸相を紹介したものであるが、「草閣」の詩の中における「泛舟慙小婦、飄泊損紅顏」の句について、旧注が「小婦」を女船頭、もしくは息子の嫁を指すことの不可なることを述べ、それが杜甫のめかけである可能性を持つことを、最晩年の詩の中に「遠婦兒侍側、猶乳女在旁」という句や、「瘞天追潘岳」という句のあることによって主張し、また「又呈吳郎」の詩に見える「吳郎」なるものが、杜甫の娘むこである可能性を持つことを、別の詩に「却為姻婭過蓬地」の句があることによって主張するなどの新見を出す。

論文審査の結果の要旨

杜甫は、唐代のみならず、中国の歴史を通じて第一の詩人との定評あるところである。本学では、鈴木虎雄教授・吉川幸次郎教授と、ひきつづきわが国における杜甫研究の第一人者がかつて在職し、著者は学生時代、吉川教授のもとに杜甫の研究に着手し、卒業後、鈴木教授の杜甫注釈改訂工作に参加し、両教授から親しく業を受けた。本論文は、一方では両教授の研究を祖述しつつ、かつさらに新しい研究分野を開こうとしたものである。

著者は、第一章「文学的考察」において、杜詩の感動を与える原因を追求して、杜甫は、ものをその奥にひろがるなにものかの象徴として捉えるという。この指摘は、吉川教授の諸著作（「吉川幸次郎全集」第12巻 杜甫篇所収）に説かれるところであるが、著者は、さらにその奥に一つの哲学、もしくは世界観の存在することを指摘する。その具体例は、第二章「作品の研究」中の『「秋興八首」序説』で、「請看石上藤蘿月。已映洲前蘆荻花」の二句に関して、「杜甫の発見したものは、時間の推移とともにしだいにその全貌をあらわにして来るこの世界の神秘であった」といい、同章『「登岳陽樓」の詩について』で、「吳楚東南坼。乾坤日夜浮」の二句は、天地が水の上に浮かんでいるという渾天説の世界観にもとづいたものであることを考証したものであり、吉川教授の敢えて説かざるところを一步進めたものといえよう。

又、第六章「雑考」の「杜甫『幽興』考」は、副題「杜甫の自然観への手がかり」の示すごとく、「幽」という字の用例を手がかりに、杜甫の「幽」の用法が、通例の「奥深い」という意味と異なり、ものみながその所を得て、のどやかにその生を楽しんでいることを形容していることを証明し、それによって、杜甫は自然をどのように考えていたかを示したのも、従来、人の説き及らなかつたところである。

つぎに、本論文は、杜甫の思想ばかりでなく、杜甫をめぐる史実に関しても、考証の精到により、従来の定説を越えて、新しい見解を提出した。第四章「杜詩の発見」の「王洙本『杜工部集』の流伝について」は、統古逸叢書本「杜工部集」が二種類の杜集をつないだ本であり、その二種がそれぞれどのような本であるかを、異文の調査と錢謙益注本との比較によって論定し、第六章「雑考」「杜甫と薬草」において、杜甫の生活は時に薬草を市に売ることによって支えられていたことを考証して、仇兆鰲注や馮至「杜甫伝」の説を深く掘り下げた。同章「杜甫家族考」において、杜甫の晩年に年少の妻があり、又、「簡吳郎司法」の吳郎が、杜甫の女婿であろうと考証するのも、著者の精細な読書と考察との結果から生み出された新説である。

一方、本論文は、鈴木・吉川両教授と異なる新しい方面の研究も志した。その第一は、第三章「杜甫と仏教」である。1971年に出版された郭沫若「李白と杜甫」の「杜甫の宗教信仰」の章で、郭氏がはじめて杜甫と仏教との関係を説くと述べているように、まったく未開拓の分野で、著者がまず論文として「杜甫の仏教的側面」を世に問うたのは1969年であって、郭氏に先鞭をつけている。しかも、杜甫の仏教思想は、その詩芸術にも、大きな影を投げかけ、杜甫晩年の思想をよく表現するとされる「秋野五首」の中の「分減及溪魚」の「分減」が「華嚴經」から出るとを考証して、晩年の詩が憂愁の中に、宗教的慈悲とでもいふべき温かさの存するのは、仏教への傾倒から出るとではないかというのは、杜甫における仏教思想の重要性をよく説明している。又、第五章「日本における杜甫」は、断片的には、吉川教授もふれるところ

ではあったが、かくもひろくもっぱらこの問題をとりあげて論じたものは、従来見られぬものであった。特に、芭蕉・島崎藤村を論じた二節は、単に杜甫の文学だけでなく、芭蕉・藤村の文学の性格を考える上での問題提起をも含むであろう。

かくのごとく、本論文は、従来の説の祖述発展と新しい研究分野の開拓が見られるが、なお議すべきところが存しないわけではない。

杜甫の詩の生前における評価について、第一章には詩人として相当の評価を受けていたといい、第五章では生前の杜甫はむしろ無名の詩人であったとあってよいという。この二箇所は、同じ資料を使用しつつ、相反する判断を下しており、原論文執筆時期による見解の変化であるにしても、本論文が一つのまとまった論文として提出されている以上、矛盾といわざるを得ない。

これほどではないにしても、おそらく各章各節が長期にわたって書きためられて来たためであろうか、そのつながりに緊密性を欠くうらみがある。

さらに、本論文は、杜甫の詩の表現を象徴と受取って、その奥にある哲学あるいは世界観を追求し、そのかぎりにおいては成功しているが、一方、表現者としての杜甫、すなわち、その奥なる思想をいかなる言語表現として定着しようとしたかという面についての追求は物足りない。日本において、杜甫の詩は、「杜律集解」によって読まれたことを、著者は力説するが、このように律詩が主として読まれたのは、杜甫の言語の装飾的美しさが重視されたことを示すものであり、本論文が表現美を説くこと稀なのは、杜甫の詩の全貌を説くには不十分のそしりを免れない。

又、「杜甫と仏教」については、唐代士大夫一般がいかに仏教を受けとめていたかという巨視的観点に立っての位置づけが必要であろうし、芭蕉芸術を特徴づける景情一致の手法が杜甫の手法と一致することは認められても、この手法が一方では日本文学の伝統にも存することを考慮して、杜甫から受取ったものをさらに析出することも必要であろう。

本論文は、かくのごとくなお不十分なところが存するが、その従来の研究の祖述発展と新しい分野の開拓は、文学博士の学位論文として価値あるものと認める。